

～男性相談の窓口から～

よしおか しゅんすけ
シニア産業カウンセラー 吉岡 俊介

1954年生。損害保険会社を早期退職後、2004年より近畿を中心に各地の自治体において男性相談窓口の開設支援や相談員として関わる。著書に『チビボテシンドローム』（講談社）『なみだ』（新風舎）など。NHKにも男性問題の解説者として出演。



その昔、「24時間戦えますか～ジャパニーズ・ビジネスマン」というキャッチ・コピーのもとで大ヒットしたCMソングがありました。その頃はバブル景気にわいていた時代で、私も以前勤めていた会社では「24時間男」を地で行く企業戦士の道をまい進していました。この歌詞を見ると、当時の男たちに期待された姿のキーワードが伝わってきます。「勇気」「戦う」「勝利」「正義」「腫の炎」「許さない」等々。長時間労働をいとわず、どこまでも精力的に頑張る姿が「男の美学」のように歌われたのです。そこには簡単に音を上げるような男のイメージは全く存在しません。

バブル崩壊後は、この歌は流れなくなりましたが、「勝ち組、負け組」という言葉が盛んに使われるようになります。

私自身も勝ち組を意識していたことを思い出します。その意識の中で、依然として歌詞のキーワードは生きていました。勇気をもって戦い続け勝ち組を目指す。それは、弱音を吐いたら戦線を離脱して負け組になってしまうという不安の裏返しでもあります。そして世の中は年間の自殺者が3万人を超える時代へと突入します。

勤めていた会社を早期退職して、男性の悩みに関わるカウンセリングや自治体の男性相談の仕事に関わるようになりましたが、以前の私のように「男の鎧」をまとい、弱音を吐けず、自分に鞭打って頑張ろうとする男性たちの姿に接します。もう戦えないほど心身ともに疲弊していても、そんな自分を許すことができない。自分の弱さに目を向けようとせず、また心の傷が深いのに、傷を負ったこと自体「負け組」として認めようとしない。そこには今の時代においても、先のキーワードに取りつかれ、「男らしさ」に縛られて苦しむ男性たちの姿が浮かびあがります。

相談する行為そのものを「男らしくない」とする男性た

ちが、追い詰められ、どうにも立ち行かなくなり、それこそ勇気を振り絞って男性相談につながってきます。「あの…つまらない悩みなのですが」「くだらないことですが、よろしいでしょうか?」。恐る恐るためらいながら^{とつとつ}訥々と語り始めます。

相談の内容は多岐にわたります。仕事、夫婦や男女関係、親子関係、健康、生き方、性に関わる問題など、様々な悩みが語られます。自分の暴力をなんとかしたいという相談もあります。彼女ができない、背が低い、スポーツが苦手などの悩みも若い世代から寄せられます。多くの場合、その根底には「男はかくあるべき」という固定的性別役割分担意識にとらわれ、ありのままの自分を受け止めることができないという問題が見られます。

こうした男性たちが身に着けた頑なな男らしさの縛りを解きほぐすことが男性相談の大きな役割のひとつです。

つらいと言える、弱音を吐ける、涙を流せる。男らしさのキーワードから解放され、本音の言葉で安心して自分の気持ちを語ることは、建て前に押しつぶされそうな自分を回復させる作業になります。それは自身の傷を癒し、ストレスを解消するだけでなく、男らしさの縛りで狭められた視野を一層広げ、問題解決に向けた第一歩につながります。

そして男性相談は次のキーワードとの出会いの場にもなります。「受け止める」「寄り添う」「つながる」。それらを実体験し、自分の新たなキーワードにすることは、身近な人との関係改善にも役立ちます。男性相談は男性たちの活力を促すだけでなく、権力志向、パワー依存の男性優位社会を解消し、社会全体のしこりを解きほぐす役割を担っています。それは男女共同参画社会の実現に向けた大切な使命といえるでしょう。

ムーブでは、今年度「男性相談員による男性相談」窓口を開設する予定です。(月2回程度)
「男らしさ」に縛られ、生きづらさを感じている方、ぜひ一度ご相談ください。